

---

# 機械の心

ウメ子

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

機械の心

### 【Nコード】

N1167D

### 【作者名】

ウメ子

### 【あらすじ】

人の欲望によって生まれた過ちは、誰の手によって正されるのか？

## 語り（前書き）

仮想世界が舞台のSFです。

## 語り

時は近未来、世界中で人間とロボットが共存していた。

人間にとってロボットは必要不可欠となっていた。

特にアンドロイドと呼ばれている、人間と見分けのつかないロボットたちが溢れていた。

人間は研究に研究を重ねて、ついに感情をもったアンドロイドを造ることに成功した。

人間はアンドロイドに魅せられ、世界中でアンドロイドを欲する者で溢れていた。

そして、アンドロイドと人間との距離は急速に縮まっていった……ように思われた。

しかし、人間とアンドロイドは悲しい歴史を刻むコトとなる。その事実気付く者は、まだ誰もいなかった。

人間は気付くべきであった。

アンドロイドに感情が生まれると、どうなるのかを……

アンドロイドの本当の目的を……

さあ、愚かな人間たちと哀しきアンドロイドの歴史を語ることにしよう。

## 語り（後書き）

初めてのSFなのでドキドキです。良かったら感想や評価をお願いします。

## 野望から生まれたもの

真つ暗な部屋に不気味な機械音が響く中、白衣を着た長身で細身の男が立っていた。

照明はコンピューターなどの機械類のみで、床や机の上には何かの資料と思われる大量の紙が乱雑に置かれていた。整理すれば広いであろう部屋も、機械や紙によって狭く感じられる。

そんな部屋の中で、男はひたすら何かのデータをコンピューターに打ち込んでいた。

しばらくして男は手を止め、コンピューターのモニターを見ながら薄く笑っていた。

「ついに……ついに待ち望んでいた時が来た。私の研究は完璧だ。ああ、この研究の成功をどれほど待っていたことか」

男は歓喜に震えた声で言った。

「自分が恐ろしい……やはり私は天才だったのだ。今まで私を邪険にしてきた者達に思い知らせてやろう。この国は、私のためにあるのだ」

男は不気味に笑い、肩を震わせながらモニターに向かって言った。

「お前たちは私の全て……私と共に、愚かな者達に制裁を与えよう」

まるで演劇でもしているかのように大袈裟に両手を広げた男は、

部屋の中央に置かれている一人の人間が入る大きさの、まるで棺のような入れ物の蓋をゆっくりと開けた。

中には、一人の少女が、数多くのチューブに繋がれて眠っていた。

腰ほどまである綺麗な栗色の髪の毛、色白の肌、綺麗に通った鼻筋、ふっくらとした唇、長い睫毛……少女は誰から見ても可憐な美少女だと思われる容姿であった。

男は、その少女の頬を愛しげに撫でながら、歓喜と狂気の混ざった笑みを浮かべ、眠っている少女に話しかけた。

「お前は私の望みを叶えるために生まれたのだ。今すぐ目覚め、私に忠誠を誓い働くのだ。……さあ、目覚めよ、私のマリア」

男は少女の入っている入れ物の近くにあるコンピューターを操作した。

ブーンという機械音が鳴り、マリアと呼ばれた少女を繋いでいたチューブが外れ、さき程まで眠っていた少女が目を覚ました。

マリアは上半身を起こして、無感情な眼で男の方を見た。

「おはようございます、クレイ博士」

可憐な少女に似つかわしくない、淡々とした口調で少女は言った。

「ああ、おはよう。お前のやるべき事は、もう分かっているな」

クレイ博士と呼ばれた男は、嬉しそうに口元を歪めた。

「はい、承知しております」

マリアはそう言うと、クレイの前に跪いた。そんなマリアの頭をクレイは愛しそうに撫でた。

これが過ちの始まりだった……全ての人間にとっても、彼にとっても。

まだその事実にも誰も気付けない。

## 過去編：人の欲望が生んだもの

人の世は、多くの欲望に支配されていた。人々は、己の欲望を叶えるコトを生きがいとして生活していた。

そんなある日、ある国の王が家来に突然言った。

「この世には、機械が数多くあり、我々の生活の手助けをしている。産業用ロボットが導入されてから、我々の仕事はとも効率よく行われている。しかし、私は未だ人間の形をしたロボット　アンドロイドを見たことがない。私はこの目でアンドロイドを見たいのだ……世界中から優秀な科学者を集める。そして、アンドロイドを造らせるのだ！」

王に言われた家来たちは、急いで世界中から優秀な科学者を捜し出し、その中でもさらに優秀であると思われる7名の科学者を国へ連れてきた。

科学者たちは、何の説明もされずに連れて来られていて、何をするのかという戸惑いをそれぞれが抱いていた。

そして、科学者たちは家来について城の中に入ると、ある一室へ案内された。その部屋はとても広く、高価な壺や絵画が飾られていた。そんな部屋にある椅子に王が座って、科学者たちを迎えていた。王は科学者たちを眺めながら言った。

「よく来てくれた。お前たちはとても優秀な科学者であると聞いている。その頭脳を見込んで、頼みたいコトがある。私のためにアンドロイドを造ってほしいのだ。姿形が似ているだけでなく、人と区

別がつかないようなアンドロイドを造ってほしい。成功させた者には報酬もやる。研究のための金はいくらでも遣ってよい」

王はそこまで話すと黙り、科学者たちの返事を待った。一人の科学者がゆっくりと前に出た。

「いいでしょう、その研究にとっても興味があります」

長身で細身の、いかにもずっと室内で生活してきたと印象を与える白衣を着た男は、笑みを浮かべながら王に言った。男は20代前半と科学者たちの中で最も若く、精悍な顔つきをしていた。最近現れた若き天才科学者として世界から注目を浴びている青年だった。

「おお、そうか。名は何と言う？」

王は男に嬉しそうに名を聞いた。男は微笑みながら王に名を告げた。

「私の名前はクレイ」ノーランド。東カルメル帝国から来ました。私をこのような素晴らしい研究に招待していただき、誠にありがとうございます」

クレイと名乗る科学者は、右手を胸元にあて、お辞儀をした。その姿を見たほかの科学者たちも、彼に続き研究に参加するコトを決めた。

その時、クレイは狂喜を帯びた笑みを浮かべたが、下を向いていた彼に気付く者はいなかった。

この日、一人の王の欲望から生まれた一言で、世界は破滅へと導

かれていく。

過去編：人の欲望が生んだもの（後書き）

初めてのジャンルというものは、なかなか難しいですね（^ー^；）  
のんびりだとは思いますが、温かい目で読んでもらえたら幸いです。

## 過去編：科学者の欲望

クレイたち科学者は、王が用意していた研究所に勤め始めた。王はアンドロイドの研究が外部に漏れるコトを危惧していた。そのため、科学者たちは生活も所内で行い、外部と接触するコトを禁じられていた。

アンドロイドの研究は次の日から行われていた。科学者たちは、誰か責任者を決めてまとめる人物が必要ではないかと話し合っていた。しかし、皆が手柄をより多く欲していたため、なかなか決まらなかった。

ここで成果をあげれば自分の名誉となる……そうすれば、世界中から莫大な研究費も貰え、研究に金銭面で苦労するコトはない。科学者たちは研究に対する欲望が強かった。そのため、我こそ相応しいと皆が名乗りを挙げている状況だった。そんな中、ある科学者が言った。

「俺はこの中で一番の年長者だ。経験が豊富な俺がなるべきだ」

それを聞いて納得のいく者などいなかった。みんな口々に自分が責任者になるべきと言い合っていた。そんな科学者たちをクレイは黙って見つめていた。

（勝手に喚いていればいい……お前たち格下にはどうせ無理なのだから）

黙っているクレイに気付いた一人の科学者が、クレイに不思議そうに聞いた。

「あなたは責任者になりたくないのか？」

「私ですか？誰がなろうとも構いませんよ。私は研究を成功させたいただけですから」

クレイはにつこりと微笑みながら言った。その言葉に全員が驚いたような安心したような表情を浮かべていた。そんな皆を見ながら、クレイは

「ただし……」と付け加えた。

「私が研究に必要なと思った方には去っていただきます。足手纏いになるだけです」

微笑みを崩さずに言うクレイに科学者たちは怒りを露にした。自分達の中で一番の若造に見下されるのは、プライドが許さなかった。年長者の科学者が怒りに震えながら言った。

「ふざけるなっ！若造が何を言っているんだ。お前が一番最初にお払い箱だぞ」

「そうかもしれませんがね。では、そうならないように気を付けます」

変わらない微笑みを浮かべながら言ったクレイに、科学者たちはさらに怒りを抱いた。すぐに追い出してやるという思いを持ちながら、最高のアンドロイドを完成させるために各々が我先にと研究に没頭しながら夜は更けていった。

「すぐに自分達の無能さを思い知るコトになる……馬鹿な連中だ」

誰にも聞こえない小さな声で呟くと、クレイはコンピューターにデータを打ち込んでいった。

誰が彼を止められるのだろうか？……この時には誰もいなかった。もし、この時に彼を止められていけば、世界は違ったのかもしれない。

## 過去編：狂気の始まり

クレイが科学者たちを怒らせてから1週間が過ぎた。しかし、ただにアンドロイド造りで少しでも成果を出している者はいなかった。

そんな彼らに苛立ちを隠せなくなってきた王は、あるコトを家来に命じた。命を受けた家来は、研究所に行き、科学者たちを集めたかと思うと、大きな声で伝えた。

「王はこう命じられた。ちょうど一月でアンドロイド造りの成果を出せない者はココから出てもらう……しかし、他の国に洩らされては困るのでそれなりの対策をとる」

「そんな無茶な……」

「王はもう待てない」

家来の冷たい言葉に科学者たちは焦った。このままでは殺されるかもしれない、何とかして成果を出させなくてはと思い、それぞれがいつも以上に頭脳を働かせてコンピュータと睨み合いながら研究を進めた。

そんな科学者たちの様子を見て、家来は哀れむような視線を向けてから去っていった。

「おやおや……かなり焦っていますね。アンドロイドとは難しいものですか？」

必死に研究を進めている科学者たちに向かってクレイは告げた彼

の口調は、完全に見下していた。一人、余裕を見せるクレイに科学者たちは怒りを露にしていた。そんな中、一人の科学者が言った。

「お前は分かったとでも言うのかっ！こんな複雑で精密なアンドロイドをそんな簡単に造れるわけがないだろっ」

「さて、優秀であると評価されているあなた達には造れない？これはどうしたものでしょうか……複雑で精密？あなた達は何も分かってない。優秀なだけの凡人が、私のような天才には遠く及ばないのですよ」

一人でこれだけ喋ると、クレイは声高らかに笑い出した。その姿は、恐怖を感じるほどの狂気を纏っていた。科学者たちは声も出せず、クレイを見つめるしかなかった。

今更ながらに後悔した……自分達とあまりにも違うクレイに気付けなかったコトを。

そんな科学者たちに見つめられながらしばらく笑ったあとで、クレイは内線を使い、家来を呼んだ。そして歪んだ笑みを浮かべながら、立ち尽くしている科学者たちに告げた。

「さあ、誰がお払い箱になるんでしょうね？」

「お前は……一体、何を考えているんだ」

一人の科学者が震えた声で尋ねた。クレイは嬉しそうに口を歪めながら言った。

「そうですね……今はまだ内緒です」

世界の破滅へと向かう歯車は回っていく……ゆっくりと少しづつ、  
着実に。もう、この狂気を止める者はいない。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1167d/>

---

機械の心

2010年10月28日08時22分発行